

園名 奈良国立大学機構 奈良女子大学附属幼稚園
奈良教育大学附属幼稚園

はばたくなら④
現職保育者の研修プログラム

幼小9年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり、支える
～幼小連携とは？何を連携し何を接続するのか～

(取組について)

幼小連携・幼小接続の重要性については各校園認識され「小学校との連携の取組を行っている園が約9割に上るなど、取組が進展している」一方で、「幼稚園・保育所・認定こども園の7～9割が小学校との連携に課題意識」をもっていること、「半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない」こと、「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が到達目標と誤解され、連携の手掛かりとして十分機能していない」ことなどが示されている。(幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 一審議経過報告 令和4年3月31日)

幼小連携・接続を何らかの方法で実施することが目的となり、根本的なところで幼小連携・接続が進んでいないことを示しているといえる。

そしてこれらの問題は、接続の部分についての議論はなされても、教育の始まりである3歳から11歳までの期間の子どもの連続した育ちを捉えた上で、目の前にいる子どもについて話をする機会が少ないことが、要因の一つと考える。

そこで、このプロジェクトでは、幼・小の参観・協議会を通して、幼児や小学生の学びの姿から、また、保育実践者と小学校教師との対話から、9年間の学びの連続性を考えると共に、保育者自身の考える幼小連携・接続とは何かを捉え直し、保育者としての専門性の向上につなげることを目的としている。

具体的には、単に疑問の投げかけで終わらないように、今の自分が捉えている幼小連携について省察し記述する「事前シート」と、実践場面で捉えた子どもの姿を手がかりに幼小の教師間で対話するタネとなる「おたずねシート」への記入を元に異文化の人同士で対話する。その中で、自分自身の幼小連携・接続への考え、子どもの連続した学び、保育者としての自分などについて創造的な捉え直しを得ることができると考えている。

(幼小の参観・協議会)

A (幼稚園)

学年別公開保育

○奈良女子大学附属幼稚園

「保育を見よう 保育を語ろう」

○奈良教育大学附属幼稚園

「共に創る保育～持続可能な社会の担い手を育む～」

B(小学校)

附属小学校参観及び協議会

○奈良女子大学附属小学校

○奈良教育大学附属小学校

A・Bの両方に、幼児教育関係者がそれぞれ1回以上参加する

このプロジェクトでは、幼小教育の専門家や奈良市教育委員会・奈良県教育委員会の指導主事等に継続して参加していただき、ともに考え合うことを通じて、汎用性のあるプログラムとなるように留意していることが特徴である。

令和4年度 奈良国立大学機構 連携教育開発センター現職保育者研修プログラムご案内

「幼小9年間の子どもの絶え間ない育ちをみとり、支える

～幼小連携とは？何を連携し何を接続するのか～



幼小連携・幼小接続の重要性については周知のとおりですが、なかなか小学校へ伝えたいことが伝えきれない、そんな悩みを抱えていらっしゃる園も多いのではないのでしょうか？このプロジェクトでは、幼稚園・小学校の保育・授業を参観し、園児・児童の学びの姿から、また、幼児教育関係者や小学校の教師との対話から、9年間の学びの連続性を考えると共に、保育者自身の考える幼小連携とは何かを自分の中で捉え直し、保育者としての質の向上につなげることを目的としています。3歳から11歳までの子どもの連続した育ちを見直し、目の前にいる子どもについて対話しませんか。多くの幼児教育関係者のご参加をお待ちしております。



QRコード、または各附属幼稚園HPよりお申し込みください。
○参加費はAについてのみ、500円です。当日お支払いください。
○受付票は発行いたしません。当日お越しください。
○申込み 各公開日2週間前
1月11日については12月20日
○定員 各回20名

申し込みはこちらから



<https://forms.gle/TDrzJ4acCR3L1X46>

参加方法：A(幼稚園)・B(小学校)の両方に、それぞれ1回以上ご参加ください。

<p>A 学年別公開保育 (以下の6回の日程のいずれか1回以上)</p> <p>○奈良女子大学附属幼稚園 「保育を見よう 保育を語ろう」 10.26(水)4歳児 11.16(水)3歳児…8:45～16:00 1.11(水)5歳児…8:45～12:30</p> <p>○奈良教育大学附属幼稚園 各回とも9:00～16:00 「共に創る保育～持続可能な社会の担い手を育む～」 1.11(金)4・5歳児 12.13(火)満3歳児 1.20(金)3歳児</p>	<p>B 附属小学校参観及び協議会 (2回のうち、1回以上)</p> <p>○奈良教育大学附属小学校 11.21(月)13:45～17:00 5限目参観・協議会</p> <p>○奈良女子大学附属小学校 1.11(水)13:40～17:00 5限目参観・協議会</p> <p>※受付は両日13:10～13:20</p>
---	---

主催 奈良女子大学附属幼稚園・附属小学校 奈良教育大学附属幼稚園・附属小学校
共催 奈良国立大学機構 連携教育開発センター
後援 奈良県教育委員会

(実践事例)

11月21日 小学校の授業参観「ころがしっこ(ボールゲーム:攻守分離系)」と協議会

<事前シート> —私が考える、幼小連携・接続の意味 お名前

幼小連携・接続に関わる自分の経験
—ポジティブ

—ネガティブ

これまで経験した幼小に関わる活動は、子どもにとってどのような意味があったと考えますか？

子どもにとって意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？

<おたずねシート> —私が考える、幼小連携・接続の意味 例

お名前 ()

子どもの姿・みとり

・先生の問いに対して、プラスの面(嬉しいなということ)とマイナスの面(嫌なこと)の両方を自分なりの言葉で考え、ノートに記入し発言している。

どうしてその場面を取り上げようと思ったのか

・ある物事や問いに対して、一方向からの考えだけでなく、違う方向からも捉えるところに子どもの育ちを感じたため。

その場面对する私の捉え(価値観)

・これまでの学校生活のさまざまな場面で、物事を色々な角度から見て予想し、考えるという経験から、子どもたちには多面的・多角的に物事を見る力、考える力が育っていると捉えた。

「おたずね」(創造的対話のタネ)

・物事を多面的・多角的に見る力、考える力はこれからの学習(人生)のどのような場面で活きるのか？

子どもの姿・みとり

どうしてその場面を取り上げようと思ったのか

その場面对する私の捉え(価値観)

「おたずね」(創造的対話のタネ)

事前シートより...

【子どもにとっての意味のある幼小連携・接続とは、どのようなものだとお考えですか？

・まずは大人同士が顔の見える関係に...

気軽に話せる。ちょっとしたことでも聞き合える、本音で話せる。

・幼小それぞれの見方考え方(共通点・相違点)を共有。

・それぞれの実態(現場の声)からできることを一緒に考えていく(参加者Aさんの記述より)

協議会の対話から...

【子どもの姿から】

・それぞれの子どもたちがいろいろな取り組み方をしている、守ったり投げたりする動きにも工夫が見られた。

・子ども達の点を取ろうとする姿から、これまでの授業の中で「得点をとる」ことをねらいとして指導されてきたことが伝わってきた。どのように授業を積み上げてこられたのか教えてほしい。

・今日の授業のねらいのためには「攻撃すること」から「守ること」へも価値を見出すことが大事であると思った。それをどのように子どもに伝えていくのか。

・どのように守れば点が入りにくいかということ、頭で理解して動きを変化させるのだろうか、自分の体験からその必要性に気づくのだろうか。それは発達と関係あるのだろうか。

【創造的対話のタネ】

(状況判断)

・このゲームでは状況判断をする力が育まれると思った。

→幼稚園でも自分で判断して行動する力を育みたいと思っている。

→入学当初は、子どもたちは先生に確認することが多い。休み時間に「遊びに行ってもいいか」と何度も聞きにくる子どもがいる。

→チャイムが鳴るとい生活に移行することによって、これまでにない不安を感じているのかもしれない。子どもにとっては、そこでも状況判断が必要とされている。

(幼児にとっての遊びと小学生にとっての遊びの違い)

・幼稚園では創造的に遊びを展開しており、子どもたちそれぞれが目的を持って遊び込み、そこには探究する姿がある。

・小学校での遊びは授業の間の休憩の時間に行っているため、好きなことはしているが時間の限りがあり、遊び込むところまではできない。

・同じ「遊び」という言葉でも子どもにとっての概念は全く違うのだろう。

ふりかえりシートより...

やはり、同じ授業(や保育)を見て、幼小で語り合うことは、お互いを「知る」にあたって、とても大事だと思いました。それぞれの当たり前が、そうではなかったり、「ちがう」と思っていたところにも共通点があったり、自分たちの教育、保育を捉え直すと同時に新たな視点を得て、お互いの実践に生かされ、それが自ずと幼小の接続につながっていくと思います。(参加者Aさんの記述より)

(成果) 幼児教育実践者と小学校教師が同じテーブルに着き、子どもの姿を通して対等な立場で語る場を設けることができた。

「おたずねシート」の仕掛けにより、相手に疑問を投げかけるよりも自らへの問い直しに思考を転換することが可能となり、創造的対話を通して自分の実践や考え方の捉えなおしを学びとすることができた。

(課題) 自らの省察に至りにくい参加者が見られたことから、「おたずねシート」の改善が必要である。